



Title	スラブ研究施設二十年の歩み (20周年記念号)
Author(s)	外川, 継男
Citation	スラブ研究, 20, 197-210
Issue Date	1975
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/5056
Type	bulletin (article)
File Information	KJ00000113018.pdf



[Instructions for use](#)

スラブ研究施設二十年の歩み

外 川 継 男

設 立 ま で

日本の国立大学においてスラブ地域の唯一の総合的研究機関として、北海道大学にスラブ研究施設が設置されたのは1955年7月1日のことであった。以来二十年の歳月が経過したが、この機会に研究施設の歩みをふりかえてみることは、ひとり研究員たるわれわれのためばかりでなく、わが国におけるスラブ研究の今後の発展のためにも無意味なことではないと考えられる。欧米諸国のスラブ研究の発展については、イギリス¹⁾、フランス²⁾、イタリア³⁾、アメリカ⁴⁾、カナダ⁵⁾、インド⁶⁾等々について、それぞれ興味ある文献が出されており、それらを参照することは、遅れて出発したわが国のスラブ研究⁷⁾にとって教えられるところが少なくない。それはこれらの国の研究の特徴を知るだけでなく、それをささえている学問的伝統や社会的背景までも示唆するものだからである。

欧米におけるスラブ研究は、おおざっぱに言って、第二次大戦までは言語学・文献学・文学史の研究を中心とする philology であった。このことは西欧諸国の現在の研究にも受け継がれている。しかるに第二次大戦後アメリカを中心に、人文・社会科学の諸分野からスラブ地域の総合的研究を指向する動きが始まり、これは比較的短期間に area study (地域研究) の指導的地位を占めるほど多くの研究者と業績を生むに至った。

- 1) R. W. Seton-Watson, "The Origines of the School of Slavonic Studies," *Slavonic Review*, Vol. XVII, No. 50 (Jan. 1939), pp. 360-371.
- 2) Luis Eisenmann, "Slavonic Studies in France," *Slavonic Review*, Vol. I, No. 2, (Dec. 1922), pp. 295-305. Alfred Fichelle, "Origines et développement de l'Institut d'Etudes Slaves (1919-1949)," *Revue des Etudes Slaves*, t. 27 (1951), pp. 91-103. 拙稿「フランスにおけるスラブ研究の歴史と現状」, 『スラブ研究』 No. 12 (1968) pp. 93-112.
- 3) Ettore Lo Gatto, "Slavonic Studies in Italy," *Slavonic Review*, Vol. VI, No. 16 (June 1927), pp. 44-58. Arturo Cronia "Slavonic Studies in Italy," *Slavonic Review*, Vol. XXV, No. 66 (Nov. 1947), pp. 197-208.
- 4) Oleg A. Maslenikov, "Slavic Studies in America 1939-1946," *Slavic Review*, Vol. XXV, No. 65 (April 1947), pp. 528-537. Harold H. Fisher, *American Research on Russia*, Bloomington, 1959.
- 5) W. J. Rose, "Slavonic Studies in the University of British Columbia," *Slavonic & East European Review*, Vol. XXVII (1958), No. 88. pp. 246-253, Victor O. Buyniak, "Slavic Studies in Canada: An Historical Review" *Canadian Slavonic Papers* Vol. IX, No. 1 (1967), pp. 3-49.
- 6) R. Vaidyanath, "Soviet Studies in India," *Canadian Slavonic Papers*, Vol. XI, No. 2, (1969), pp. 145-155.
- 7) 日本のソ連(ロシア)・東欧研究については以下の英文のものがある。Peter Berton, Paul Langer, Rodger Swearingen, *Japanese Training and Research in the Russian Field*, Los Angeles, 1956. Kenzo Kiga, "Study of the Soviet Union and Eastern Europe in Japan," *Canadian Slavonic Papers*, Vol. XI, No. 2 (1969), pp. 156-166. Hiroshi Momose, "Soviet Studies in Japan," *Annual Review*, Japan Institute of International Affairs, Vol. 5 (1969-70), pp. 159-167.

北海道大学スラブ研究施設も、基本的にはこのようなスラヴ地域の総合的研究を目的として設立されたが、その中心となって努力したのは当時北大法学部で政治学を担当していた尾形典男と、文学部でロシア文学を講じていた木村彰一であった。尾形自身は必ずしもアメリカ流の地域研究の考えに全面的に賛成していたわけではなく、何よりもイデオロギーに左右されぬ開かれたソ連・東欧の研究を考えていた。その際に彼がめざしていたのは、歴史研究を中心として、スラヴ諸国の文化や思想様式の本質を研究し、ひいては何故にロシアで革命が起こり、それが一応の成功を見たかを理解することであった。さらにそこには第二次大戦後によく文系学部を設置するに至った北海道大学が、単にローカルな大学としてとどまることなく、人文・社会科学の分野でユニークな研究を創設せんとする意図があった⁸⁾。

いずれにせよこのような尾形の希望がロックフェラー財団によって認められるところとなり、設立に先立って数百点にのぼるスラブ研究の分野での基本文献が寄贈された。これをもとにして尾形と木村の二人によって、将来研究施設のメンバーとなる研究者の人数がすすめられ、1953年6月24日、北海道大学に**スラヴ研究室**が設立された。その時の各部門と研究員は以下の通りである。

主 任 木村彰一（北大文学部教授）

研究員（文学部門） 金子幸彦（一橋大学社会学部講師）、北垣信行（北大文学部助教授）

（歴史部門） 岩間徹（東京女子大学教授）、鳥山成人（北大文学部助教授）

（政治部門） 猪木正道（京都大学法学部教授）

（経済部門） 内海庫一郎（北大経済学部教授）

（国際関係部門） 江口朴郎（東京大学教養学部教授）

ここに見られる部門別の研究体制と、北大および北大以外の他大学の研究者をも研究員として委嘱する体制は、二年後に**スラヴ研究施設**として官制化された際にもそのまま受け継がれ、現在まで及んでいる。

しかしそれから二年あとに官制化されるに当って、当初設置されたのはわずか半講座（助教授1、助手1）にすぎず、独立した研究機関として機能することが不可能であったため、尾形と木村が時の北大学長島善鄰を仲介者として、将来独立した研究機関となるまで当分の間法学部附置の研究施設とすることを法学部教授会との間に取決めた。しかし「研究施設の運営、組織、予算、人事、その他重要事項」は研究員会議において審議されることが「規程」において明記され（第五条）、事実上独立の研究機関たることが北大評議会において承認された。このように制度的には法学部所属でありながら、事実上独立しているという、いわば変則的なあり方は、一つには地域研究という学際的な研究分野がわが国において未発達であったことと、第二としてこの研究施設が可及的速やかに独立した研究機関になることが前提とされていたためであった。そしてこの二つの条件が満たされぬまま二十年の歳月が経過したのであるが、今日スラブ研究施設が抱えているさまざまな問題は、基本的にはいずれも以上の事実由来のものであると見てよい。

8) 以上は1975年1月22日に尾形が筆者に直接語ったところである。

部門ならびに研究員の変遷

このようにして設立された北大法学部附属スラブ研究施設は、歴史・文学・政治・経済・国際関係の五部門にわたって、次の三つのカテゴリーからなる研究員および助手と事務官によって構成されることとなった。第一のカテゴリーはスラブ研究施設プロパーのメンバーで、これには主任の鳥山と経済部門の山本敏の二名と、事務担当者として豊田久馬彦、更科道子、芳賀柳二の三名が配置された。この五名が主任を中心として恒常的な研究活動を組織、補佐する。ついで第二のカテゴリーとして北大文系各学部の教官がおり、これには前記木村、北垣、内海のほかに、法学部の尾形が加わり、さらに文学部助手（ロシア文学科）の福岡星児が参加した。第三のカテゴリーの北大以外の他大学に籍を置く研究員としては、前記の金子、岩間、猪木、江口の四名に、1956年からは東京大学に移った木村が加わり、このメンバーはそれ以後十余年にわたって兼任研究員をつとめる。1957年には尾形、内海、福岡が去って、文学部助手（ロシア文学科）の松井茂が兼任助手として参加し、さらに1959年からは政治部門に矢田俊隆（北大・法・教授）が加わった。さらにこの年には新たに法律部門が設けられ、翌年から北大法学部教授の五十嵐清が参加し、ここに現在まで引き継がれる基本的構成が成った。

これら北大内外のほぼ十名から成る研究員は、年二回開かれる研究員会議において、研究施設の予算と人事をはじめとする運営全般の審議に参加するとともに、三日間にわたる研究報告会に出席して、それぞれ研究報告をしたり、討論に参加することになる。

このようにして発足したスラブ研究施設の存在は、はやくも1956年に米国で出版された『ロシアの分野における日本の教育と研究』のなかで取りあげられ、つぎのように書かれるにいたった。

「現在のところ、アメリカ合衆国におけるいくつかの地域研究所と同様に、スラブ研究施設はいまだ主としてさまざまな分野の地域研究の専門家をとりまとめる組織にとどまっている。……ロシア語やロシア文学や歴史の教育とはまた別に——これは厳密に言えば大学の責任であって研究所の仕事ではないのであるが——研修センターとしてのスラブ研究施設の将来は、主として研究の分野にあるように思われる。それでも人文科学や社会科学の主な研究は東京と京都でなされるべきだという日本の伝統がなければ、学際的なロシア地域研究と研修センターとしての北海道大学スラブ研究施設の可能性は、日本のいかなる研究所にも負けぬほど大きい。」⁹⁾

このようにアメリカの学者に記されてから八年たって、1964年によりやく一部門が追加されて、制度上は二部門となった。そしてこの年専任の研究員として国際関係部門に百瀬宏が加わり、また北大から東大に移った北垣の代りに北大文学部の福岡が併任研究員となった。ついで1969年には設立以来14年にわたって施設長を勤めた鳥山が北大文学部に移り、前記百瀬が施設長に就任するとともに、1957年以来専任の助手であった外川継男が専任研究員として歴史部門に加わった。鳥山は文学部に移ったあとも併任研究員としてひきつづきとどまったが、この年政治部門の猪木が京都大学を辞任すると同時にスラブ研究施設からも去った。この政治部門には翌1965年猪木の弟子でコロンビア大学で学位をとっ

9) Berton, Langer, Swearingen, *op. cit.*, pp. 101-102.

た木村汎が専任研究員として就任した。ほぼこの時期から北大内外の研究員の間で交代が見られるようになり、北大外の兼任研究員については一期三年という原則のもとに、後に述べるような共同研究に沿った人選がすすめられるようになる。百瀬のあと1971年には外川が施設長に選出されるとともに、北大経済学部の日南田静真と神戸大学法学部の木戸翫がそれぞれ経済部門と国際関係部門の併任研究員となった。翌1972年にはスラブ研究施設の設立当初から専任のメンバーであった山本が北大を去ることによって研究員をやめ、学習院大学の斉藤孝が国際関係部門の兼任研究員に就任した。ついで1974年には前施設長の百瀬も北大から津田塾大学に移ったが、彼はひきつづき兼任研究員として国際関係部門を担当するところとなった。この年には1964年から専任助手であった出かず子が文学部門の研究員となるとともに、ベルリン自由大学にながく留学していた伊東孝之が国際関係部門の専任研究員に就任した。この間北大外の兼任研究員として設立以来参加していた文学部門の金子が1972年に、また歴史部門の岩間が1973年にそれぞれ辞任し、代りに関西大学の平井友義が政治部門の兼任研究員となった。

1975年5月1日におけるスラブ研究施設のメンバーは以下の如くである。

施設長 外川継男（歴史）

専任研究員 木村汎（政治）、出かず子（文学）、伊東孝之（国際関係）

北大内の併任研究員 鳥山成人（歴史）、福岡星児（文学）、矢田俊隆（政治）、日南田静真（経済）、五十嵐清（法律）

北大外の兼任研究員 木村彰一（文学）、平井友義（政治）、木戸翫（国際関係）、斉藤孝（国際関係）、百瀬宏（国際関係）。このほかに研究補助のための助手として坪谷七魚子とライブラリアンとして秋月孝子、事務担当の長手恵美子の三人がいるが、なかでも司書の秋月は北大文学部西洋史学科の出身で、英・独・仏・露語のほかポーランド語もこなし、多岐にわたる種類の図書整理の上でなくてはならない存在となっている。

研 究 活 動

スラブ研究施設の研究活動は、個々の研究員の研究と、施設全体としての共同研究に分けられる。自然科学の諸分野と異なって、文系の研究はなによりも研究者個人の問題意識と学問的関心に依拠するところが大きく、共同研究の成果もこのような個人研究をいかに無理なく有効に組織化するかにかかっている。

各部門の現研究員の専攻領域と主要業績は以下の如くである。

（歴史部門）

外川継男 19世紀ロシアの社会思想が中心で、チャアダーエフ、ゲルツェン、バクレーンに関する著書・論文・翻訳がある。著書『ゲルツェンとロシア社会』（御茶の水書房、1973年）、訳書『鞭のゲルマン帝国と社会革命』（白水社『バクレーン著作集』第3巻、1973）他。

鳥山成人 ロシア・東欧史に関する史学史・思想史・制度史をほぼ広く研究し、近年はロシア絶対主義の研究に打ち込んでいる。著書に『ロシア史』（修道社、1956年）、『スラヴの発展』（文芸春秋社『大世界史15』1968）、論文に On the Muscovite Autocracy (*Forschungen zur osteuropäischen Geschichte, Bd. 18, 1973*) などがある。

スラブ研究施設二十年の歩み

(文学部門)

出かず子 19世紀ロシア文学，とくにレールモントフ，ツルゲーネフ，チェルヌィシェフスキーを中心に研究をすすめている。主要論文に「チェルヌィシェフスキーの美学理論」『スラブ研究』No. 13-14，「余計者、小考」『スラブ研究』No. 18 (1973) がある。

福岡星児 ロシア中世文学，19世紀文学，ポーランド文学に関する幅広い研究をおこなっている。主要論文「ボリースとグレープの物語」『スラブ研究』No. 3, 1959, 訳書『尼僧ヨアンナ』(恒文社『東欧の文学全集』第八巻，1973) など。

木村彰一 スラブ文献学・言語学・ロシア文学の諸分野において，先駆的な研究をあげ，現在はロシア語統辞論と『イーゴリ軍記』を主たる研究テーマとしている。主著『ロシア文法』(八杉貞敏と共著，岩波書店，1956)，『ロシア——ソビエト文学史』(中央公論社，1958)，訳書「イーゴリ遠征譚—訳および注1-4」『スラブ研究』No. 1, 2, 3, 15 他。

(政治部門)

木村汎 ソ連および東欧の現代政治を専攻し，とくにソ連の対東欧政策とソ連における政治の実態の研究に取り組んでいる。論文「ソ連の対東欧政策——介入規定要因の研究」『日本国際政治学年報』No. 44 (1971)，「党史と政権——歴史的，比較的研究」『スラブ研究』No. 16 (1972) など。

矢田俊隆 中・東欧の政治史研究を専攻領域とし，とくに近年はハプスブルク帝国と民族問題を中心に研究をすすめてきた。著書『近代中欧の自由と民族』(吉川弘文館，1966)，『メッテルニヒ』(清水書院，1973)，論文「オーストリア・ハンガリー二重帝国の構造と特質」『北大法学論集』No. 25-2 (1974) 他。

平井友義 ソ連・東欧および中東をめぐる国際政治史を中心に研究し，とくに1930年代のソ連外交とコミンテルンの歴史に焦点を合わせている。主著「ソ連外交と東欧—ロカルノをめぐる歴史的覚書—」(1961)，「ソ独戦前夜のソ連の戦争準備について (一)」(1968)，「1935年仏ソ同盟条約の成立をめぐる一考察」(1972) など。

(経済部門)

日南田静真 ロシア経済史，とくにロシア資本主義論を中心に研究をおこなっている。主著『ロシア農政史研究』(御茶の水書房，1966)，論文“Русский капитализм и отработочная система в сельском хозяйстве России”『スラブ研究』No. 18 (1973) 他。

(法律部門)

五十嵐清 比較法と民法の専門家であるが，とくに当研究施設においては社会主義法と資本主義法の比較研究をおこなっている。主著『比較法入門』(日本評論社，改訂版，1972)，論文「法系論再説」『北大法学論集』21-1, 3 (1974) 他。

(国際関係部門)

伊東孝之 東欧諸国，なかんずくポーランドおよびチェコスロヴァキアの近・現代史の研究と，マルクス主義の思想と運動の諸問題を研究対象としている。論文「戦後ポーランドの成立，1943-45年」『スラブ研究』No. 18，「マルクス主義の民族自決概念と東欧の民族問題，ローザ・ルクセンブルク」『スラブ研究』No. 18 (1973) など。

木戸蓼 バルカンの現代史研究が中心であるが，とくにユーゴスラヴィアおよびルーマニアの内政と外交を中心に研究をおこなっている。論文「ソ連=ユーゴスラヴィア関係史

—第二次大戦から1948年まで」(立川編『国際政治の史的構造』ミネルヴァ書房, 1968), 「ルーマニアにおける内政と外交」(日本国際政治学会編『戦後東欧の政治と経済』, 1971) 他。

百瀬宏 バルト地域を中心とする国際関係史が専攻領域であるが、現在とくにフィンランドとソ連の関係、日本の外交史料に見られる両大戦間のバルト地域に中心をおいて研究をおこなっている。著書『東・北欧外交史序説——ソ連・フィンランド関係の研究』(福村出版, 1970), 論文“Japan's Relations with Estonia between the Wars. From the Archives of the Japanese Foreign Ministry” *Uralica*, No. 2 (March, 1975) など。

斉藤孝 専攻領域は両大戦間期のヨーロッパ外交史、ソ連外交史であるが、現在は米中ソ関係を中心に研究をすすめている。著書『第二次大戦前史研究』(東大出版会, 1965), 『スペイン戦争』(中央公論社, 1966), 『現代の国際政治』(現代史出版会, 1973)。

つぎに**共同研究**につき記す。以下の共同研究に当っては文部省の科学研究費補助金に負うところが大きい。これは先に述べたように、当研究施設が実質的に北大内外の共同利用研究機関でありながら、制度上は法学部附属の研究施設となっているため、兼任の研究員は非常勤講師の扱いとされ、研究費の上で格別配慮がなされていないためである。しかし科学研究費補助金は必ずしも毎年交付されるとはかぎらず、これが共同研究をすすめる上でつねに障害となっているが、以下に見るように発足以前から、ほぼ恒常的に一定の研究プロジェクトをきめ、共同研究がおこなわれてきた。この点で兼任研究員の犠牲的な協力に負うところが大きい。なおこの共同研究に当っては、研究員以外に外部から講師を招へいして報告をしてもらうことも、しばしばおこなわれている。

(1) ロシア人民主義の研究 (1953-58)

(口頭発表)

岩間 徹 ナロードニキの系譜 (1954)

金子幸彦 ナロードニキの人間像 (1954)

鳥山成人 ピーサレフについて (1954)

山本 敏 オガリョフの農業理論 (1954)

金子幸彦 ソビエト学界におけるナロードニキ史の取扱いについて (1955)

鳥山成人 「人民の意志」党の革命理論について (1955)

猪木正道 バクーニンの政治思想 (1956)

金子幸彦 チェルヌィシェフスキーの文学理論 (1956)

岩間 徹 二つのナロードニチェストヴォ (1957)

鳥山成人 ナロードニキ研究の問題点 (1957)

山本 敏 ニコライ・オン著『改革後我国経済概要』について (1958)

金子幸彦 ピーサレフについて (1968)

D. W. Treadgold Marx and Russia (1968)

出かず子 チェルヌィシェフスキーの『ランデ・ヴーにおけるロシア人』について(1970)

外川継男 バクーニン・アルヒーフの刊行について (1972)

Franco Venturi Recent Soviet Studies in the Russian Populism (1975)

スラブ研究施設二十年の歩み

(論文等)

- 鳥山成人 「『人民の意志』党の革命理論—資料と解説」『スラブ研究』No. 1
松井茂雄 「ベ・エリ・ラヴロフ『歴史書簡(翻訳)』『スラブ研究』No. 1-5
IWAMA Toru 「Two Narodnichestvos」『スラブ研究』No. 2
勝田吉太郎 「バクーニンの革命論」『スラブ研究』No. 3
鳥山成人 「ラヴリズムの形成—綱領『前進!』成立小史」『スラブ研究』No. 4
TOGAWA Tsuguo 「Sur la formation de la théorie du “socialisme russe” chez Herzen」
『スラブ研究』No. 4
外川継男 「二つの論争—ゲルツェンのツルゲーネフとバクーニンとの論争に寄せて (I)
(II)」『スラブ研究』No. 15, 17
外川継男 「檄文の時代—人民主義の発生をめぐる若干の資料と解説」『スラブ研究』
No. 16

(2) ロシア社会の近代化に関する研究 (1964-65)

(口頭発表)

- 外川継男 ロシアと日本における近代化の比較研究について (1965)
江口朴郎 後進国における近代化について (1965)
C. E. Black Soviet Society: a Comparative View (1965)

(論文等)

- 鳥山成人・外川継男 「『近代化』をめぐる報告と討論」『スラブ研究』No. 10

(3) 東欧におけるフェデラリズムの研究 (1965-66)

(口頭発表)

- 江口朴郎 第一次大戦とスラブ世界 (1963)
矢田俊隆 ハプスブルク帝国におけるフェデラリズムの問題 (1964)
百瀬 宏 「東ヨーロッパ」の概念について (1965)
矢田俊隆 第一次世界大戦とハプスブルク帝国 (1968)
矢田俊隆 西ヨーロッパにおけるハプスブルク帝国史研究の近況 (1971)

(論文等)

- 矢田俊隆 「オーストリア社会民主党と民族問題」『スラブ研究』No. 6
横山 信 「両大戦間期フランスの東欧政策研究序論」『東欧研究会々報』No. 2
外川継男 「ゲルツェンにおける『スラブ連邦』の思想をめぐる」『東欧研究会々報』
No. 2

- 鳥山成人 「ポーランド=リトワ連合小史」『スラブ研究』No. 10
MOMOSE Hiroshi 「A Survey of Eastern Europe from the Viewpoint of Japanese
Scientists」『スラブ研究』No. 10

(4) ロシア革命の研究 (1957-59, 1968-69)

(口頭発表)

- 江口朴郎 ロシア革命論 (1957)
相田重夫 ソヴェトにおける十月革命史研究の現段階 (1957)
相田重夫 ブレスト・リトウスク条約の諸問題 (1959)

- 鳥山成人 ユーラムのソヴェト政治論について (1960)
勝田吉太郎 ソヴェト体制と軍部 (1962)
高岡健次郎 エス・エルの農業綱領の性格とその結果について (1962)
鳥山成人 江口朴郎編『ロシア革命の研究』について (1969)
外川継男 ハーヴァード大学におけるロシア革命 50 周年記念 シンポジウムについて (1969)

(論文等)

- 猪木正道 「レーニン・スターリンにおけるプロレタリアート独裁理論の発展」『スラヴ研究』No. 4
荒又重雄 「プレハーノフとプロレタリアートのヘゲモニーの問題」『スラヴ研究』No. 4
高岡健次郎 「ロシア臨時政府に関する一考察——特に連立政府に対するエス・エルの動向を中心として (I) (II)」『スラヴ研究』No. 12, 14

(5) ロシア・東欧におけるナショナリズムの諸問題 (1970-73)

(口頭発表)

- 江口朴郎 「コミンテルンと東方」についての最近の研究動向について (1970)
木村 汎 ソ連の対東欧政策 (1970)
百瀬 宏 第二次大戦とフィンランド——独ソ戦争への「参加」の事情をめぐって(1971)
宮島直機 ポーランド近代史とピウスツキ (1972)
南塚信吾 東欧における農奴解放と民族問題 (1974)

(論文等)

- 矢田俊隆 「オーストリア＝ハンガリー帝国の崩壊」(岩波講座『世界歴史』) 第 24 卷
木村 汎 「ソ連の対東欧政策——介入要因の研究——」『国際政治学年報』1970 年秋季号
百瀬 宏 「北・東ヨーロッパのファシズム」『社会思想』Vol. 2, No. 3
矢田俊隆 「ハプスブルク帝国の統合と分解をめぐる諸問題 (I) (II)」『北大法学論集』Vol. 23, No. 2-3
伊東孝之 「東欧の民族問題とマルクス主義の民族自決概念——ローザ・ルクセンブルク」『スラヴ研究』No. 18

(6) ソ連社会の変遷と対外関係 (1973-75)

(口頭発表)

- 中西 治 米中ソ関係と転換期のソ連外交 (1972)
伊東孝之 ソ連・ポーランドの共産党文献にあらわれたソ＝ポ戦争 (1919-20) (1972)
斉藤 孝 ソ連邦における第二次世界大戦研究 (1973)
山内昌之 トルコ＝アルメニア戦争とトルコの対ソ関係 (1973)
岩田昌征 ユーゴスラビア社会主義とソビエト社会主義 (1974)
鹿毛達雄 「ドイツの 10 月」とファシズム (1974)
百瀬 宏 「第二次大戦中のソ連のフィンランド政策——戦後への展望によせて (1975)

(論文等)

- 木村 汎 「ソ連邦における個人的副業経営——とくに社会的経営との関係において——」『スラヴ研究』No. 18

スラブ研究施設二十年の歩み

伊東孝之 「戦後ポーランドの成立——ソ連外交とポーランド労働者党の戦術（1943-1945年）」『スラヴ研究』No. 18

百瀬 宏 「戦後フィンランドの対ソ関係（1944-1948）に関するノート」津田塾大学『国際関係学研究』No. 1

さらにスラブ研究施設を中心として、1970年5月に北海道スラヴ研究会が設立され、現在に至るまでほぼ定期的に月例研究会がおこなわれてきた。この研究会は単に北大のみならず札幌周辺の他大学の研究者や学生、社会人にも開かれたものであって、スラヴ研究に関心のある者で会費を納入すれば誰でも加入することができる。この研究会における発表者と報告テーマは以下の如くである。

(1970年度)

Roger Portal 19世紀ロシアの工業中産階級

藤井一行 ベリンスキーとナジェージデン

成田博之 レーニンと第二インターナショナル

鳥山成人 松田道雄著『革命と市民的自由』について

若林大鬼智 ブロークの恋愛論について

外川継男 ゲルツェンとツルゲーネフの論争をめぐって

山内昌之 ソビエト＝トルコ関係（1920-1923）——国家的関係とイデオロギー的關係——

出口健司 クロンシュタットの叛乱（1921）

望月喜市 社会主義経済理論の最近の動向

池田博行 シベリア開発

日南田静真 浜内謙著『ソビエト政治史——権力と農民——』について

木村 汎 浜内謙著『スターリン体制の成立（第I部）』について

(1971年度)

栗生沢猛夫 ヨシフ・ヴォロツキー（1439-1515）の政治理論

望月喜市 ソ連経済の発展と再生産構造——第八次五ヶ年計画の総括と第九次五ヶ年計画の見通し——

出かず子 F. Randall 著『チェルヌィシェフスキー』について

外川継男 A. Walicki のロシア人民主義論について

三宅正樹 現代史におけるヨーロッパと日本——帝政ロシア外交文書集の反訳の問題をめぐって——

小平 武 初期のマヤコフスキー

西川正雄 第二インターナショナルにおける植民地問題

Jean Baptiste Duroselle 第二次世界大戦をめぐって

中村健之介 ドストエフスキーの『未青年』について

荒又重雄 「改革」前後のロシアの労働政策——Zelnik に学んで——

渡辺善一郎 ソ連とソ連人

金子信雄 ドブロリューボフの世界観の形成

早坂真理 トカチョフの革命思想

- 佐保雅子 ソビエト法における労働者の解雇について
(1972年度)
- 百瀬 宏 東北ヨーロッパと日本外交 (1918-1944)——日本側史料の紹介によせて
- 工藤正広 パステルナーク著『わが妹・人生・1917年夏』の神話
- 秋月俊幸 日露雑居時代の樺太——現地ロシア側書簡資料から——
- 嶺野 修 ブハーリンとコミンテルン序説
- Mrs. M. A. Lucas ブルガリアについて
- 伊東孝之 ポーランドにおける現代史研究の近況
- 佐藤正人 ミールに関するマルクスおよびエンゲルスの見解について
- 竹田正直 ロシア教員組合運動史 (1905-1907)
- 山内靖子 『革命ロシア』に見られるエス・エル党の思想的特質——土地の社会化を中心に
して (1900-1906)——
- 左近 毅 最近のソ連におけるバクレーン研究
(1973年度)
- Jerzy Ślizinski 比較文学の方法論の諸問題
- 松田 潤 ラヴローフの『歴史書簡』の実証主義
- 内藤 操 「ナロード」について——言葉の実感から——
- 神田明典 レニングラード大学にロシア史を学んで (1967-1973)
- 藤家壮一 外国人にとってのロシア語のむずかしさ (ロシア語否定他動詞の補語——対格
か生格か?)
- 中村健之介 夢想家小見——ドストエフスキーの初期作品
- 伊東孝之 ローザ・ルクセンブルクのロシア観
- 灰谷慶三 ビャチスラフ・イワーノフの『ディアード論』について
- 外川継男 カナダにおけるスラヴ研究
- 日南田静真 19世紀末ミールに関する文献上の一問題
- 小平 武 ブロークの『バラと十字架』について
(1974年度)
- 花田圭介 管見ブルガリア
- 富岡庄一 19世紀末ロシア工業化における外国企業の役割
- 栗生沢猛夫 イワン四世=クールプスキー公往復書簡について——最近の論争を中心に——
- Franco Venturi ロシア人民主義の研究をめぐる
- 松本忠司 ゴーリキーの書簡について
- Vig Rudolf ソ連・東欧におけるジプシーの生活と音楽
- 出かず子 1974年夏ロシア文学の旅
- 伊東孝之 1974年初秋ソ連・東欧の旅
- 城田 俊 チェコの印象
- 望月喜市 ソ連経済の最近の状況
- 工藤正広 パステルナークの第二の恋

出版・教育・文献収集等

以上の個人研究および共同研究の成果は、毎年発行されるスラブ研究施設の紀要『スラブ研究』に発表される。これは1957年に第1号が出されてから1974年までに19号を数えるが、近年はわが国の学界のみならず、欧米のスラブ研究者のあいだにも注目されるようになった。

さらにスラブ研究施設においては、かねてから必要が痛感されていたわが国におけるソ連・東欧研究者名簿を作るべく、1971年春537人の研究者にアンケートを送り、これにもとづいて460人の研究者のリストを作製した¹⁰⁾。

これは(1)姓名、(2)生年月日、(3)最終出身校および卒業年次、(4)勤務先、(5)現住所と電話番号、(6)所属学会、(7)専攻領域、(8)主要業績の八項目から成っており、この460人の専門別内分には以下の通りである。

- (1) 語学・文学 157人
- (2) 経済 137人
- (3) 歴史 61人
- (4) 政治 37人
- (5) 法律 24人
- (6) 国際関係 11人
- (7) その他 35人

このほかスラブ研究施設欧文図書目録¹¹⁾、欧文雑誌目録¹²⁾、マイクロフィルム所蔵目録¹³⁾および研究施設便覧¹⁴⁾が出されている。

教育活動としては、設立以来全研究員によって、二単位のスラブ地域特殊講義が集中講義の形で分担されてきたが、1970年からは四人の専任研究員による通年四単位の講義がおこなわれるようになった。

- 1971年度 ロシア・ソ連の政治と経済（歴史—外川、国際関係—百瀬、経済—山本）
- 1972年度 ソビエト社会—その歴史・経済・法律・政治（外川、山本、木村）
- 1972年度前期 ソビエト現代史の諸問題（木村）
- 後期 フィンランド近・現代史（百瀬）
- 1973年度前期 カルポーヴィチ『ロシア史概説』原書講読（外川）
- 後期 ロシア文学における「余計者」の系譜（出）
- 1974年度前期 グロス『人民ポーランド—政府と政策』原書講読（伊東）
- 後期 バーリン『ロシア文化の沈黙』原書講読（外川）
- 1975年度 ソビエト政治の諸問題（外川・木村）

10) 『わが国におけるソ連・東欧研究の動向—List of Researchers in Soviet and East European Studies in Japan』, 1972.

11) 『欧文図書目録, 1953-1965』, 1966. 『欧文図書目録, 1966-1970』, 1972.

12) 北海道大学法学部所属スラブ研究施設『欧文雑誌目録, 1953-1973』, 1973.

13) 『マイクロフィルム所蔵目録, 1953-1971』, 1971.

14) 北海道大学『スラブ研究施設便覧』1970, 1973, 1975. *Bulletin*, The Slavic Institute of Hokkaido University, 1970, 1975.

さらに北大内外の学生や研究者を対象として、正規の授業とは別に、単位にならないセミナーや講習会が開かれている。

- 1970年度 バクーニン研究（外川）
 フレロフスキー『経済著作選集』講読会（山本）
- 1971年度 ソ連邦共産党中央委員会テーゼの講読会（木村）
 ミールの諸問題（山本）
- 1972年度 フィンランド語入門（百瀬）
 ロシア社会思想史研究（外川）
- 1973年度 ポーランド語入門（伊東）
 ロシア史関係論文講読会（外川）
- 1974年度 ポーランド史講読会（伊東）
 ロシア史関係論文講読会（外川）
- 1975年度 ポーランド語会話（伊東、福田ヤニーナ）

これらのセミナーに出席するのは主として大学院生であるが、そのなかから1974年には栗生沢猛夫と早坂真理の二人がドイツ連邦政府とポーランド政府の給費留学生試験にパスして、それぞれベルリン自由大学とワルシャワ大学に留学している。

以上のほか外川と出は毎年のように文学部のロシア文学の講義を持ち、伊東は法学部の国際政治の授業を担当している。

さらに教育啓蒙活動の一環として、毎年七月札幌で開かれる研究員会議の折に、主として北大外の研究員による**公開講演会**も開かれている。これは1965年に設立十周年を記念して開催されたことがあったが1969年以降は毎年おこなわれるようになった。

- (1969年) 江口朴郎 ロシア革命の現代的意義
 木村彰一 スラヴの使徒キリールの業績について
- (1970年) 岩間 徹 ロシアのインテリゲンツィア
 金子幸彦 トルストイについて
- (1971年) 木村彰一 晩年のトルストイ
 百瀬 宏 フィンランドとロシア——現代の歴史像——
- (1972年) 斉藤 孝 ソ連外交の歴史的特質
 木村 汎 ソ連と東欧——共産圏における大国・小国関係
- (1973年) 木戸 蕪 ユーゴスラビアの社会主義
 平井友義 コミンテルンとソ連外交——分化と統合——
- (1974年) 斉藤 孝 最近の中ソ関係
 南塚信吾 ハンガリー留学から帰って

内外の研究機関との関係

スラブ研究施設は設立以来、内外の大学、図書館、研究機関と学術的關係を発展させるべく努力してきた。わが国の主要な大学には紀要『スラヴ研究』を送付しているが、とくに図書目録を刊行することによって、各地の研究者から文献の資料の貸出しに答えている。また兼任研究員以外に北大外の大学から、内地研修員としてスラブ研究施設で長期、

スラブ研究施設二十年の歩み

短期にわたって研究をおこなう者も近年めだつようになった。外国との関係では、ソ連・東欧の主要な大学、研究所、図書館と文献の交換をおこなっている。しかし国立大学の予算上の制約から、先方から寄贈された分の見返りとして、社会主義諸国がとくにのぞんでいる日本語の研究文献を購入して、送付できないことが文献交換上のネックとなっている。

外国からの研究者も毎年のように本研究施設を訪ねるが、西側ではアメリカの学者がもっとも多い。ソ連・東欧圏からは、1973年度に当研究施設が日本学術振興会の客員研究員として、ポーランド科学アカデミー・スラヴ研究所のイエーヂィ・シルジンスキー教授を招へいした。また本年（1975）は、日ソ学術交流にもとづく三名のソ連の学者の来訪が予定されている。

蔵書および図書収集について

スラブ研究施設の蔵書数は、本年までに約17,000点に達するが、その多くは1955年以後出版された図書である。これらは歴史、文学、政治、経済、法律、国際関係という六つの研究部門にまたがっているが、いずれも研究員と図書職員の努力によって、毎年発行される龍大な文献から精選されたものである。創設以来図書の購入には特に力を入れ、研究員個人が購入したいものであっても、一冊しかないときは研究施設の蔵書として入れるように努めてきた。これらの大部分は、ソ連（ロシア）関係のものであるが、近年ポーランドおよびフィンランドの近・現代史に関する文献も徐々に増加しつつある。また小さな研究機関としては雑誌文献が比較的多いことも特色と言えよう。欧文約110点、露文約130点におよぶこれらの定期刊行物のうち、主要なものに関しては、1960年度にロックフェラー財団から補助金を得て、マイクロフィルムの形で欠号をうめてある。これらの雑誌文献は、とりわけわが国の研究者によって頻繁に利用されている。

しかしこれら図書の購入に関しては、近年における書籍の値上がりや印刷費の高騰によって、ますます大きな制約を受けるようになっており、科学研究費の補助金による購入の割合が多くなってきている。

将来への展望

以上においてスラブ研究施設二十年の歩みを概観してきたが、幾多の困難にもかかわらず、今日まで研究を維持し発展させることができたのは、ひとえに歴代の主任・施設長をはじめ、研究員と事務担当者の献身的努力に負うものである。しかし設立当初想定していたように、可及的速やかに学部附置の研究施設から独立した大学附属の研究機関へ脱皮することは、二十年の歳月をもってしてもまだ実現されていない。これはわが国においてソ連・東欧研究の必要性が今日なお焦眉のこととして痛感されていないこと、地域研究という学際的研究のあり方が従来の講座制、学部制の研究体制になじまないことと並んで、われわれの努力や研究実績がまだ十分ではないところからきている。

近年スラブ研究施設は、従来の共同研究の体制をさらに強化し、学問的・社会的要請に答えるべく、北海道大学附属「ソ連・東欧研究センター」への改組拡充をめざしている。これは歴史、文学、政治、経済、法律、国際関係の各部門に最低一人の専任研究員を配

し、北大内外の専門家を兼任もしくは客員として各部門に数名置くことによって、従来以上の総合的な成果を意図するものである。

明年開学百年を迎える北海道大学に、文科系のユニークな研究機関として「ソ連・東欧研究センター」が設立され、わが国はもとより諸外国のこの分野のいずれの研究機関にも劣らない研究業績がつぎつぎと産み出される日が到来することを切望してやまない。

(Sapporo. Apr. 30, 1975)